教員研修で学ぶ意味と成果を関連付けた学習目標の明確化の方法

A Specification Method of Learning Objectives Correlating Meaning and Outcome for Teacher Training

望月　紫帆　　西之園　晴夫　　堀出　雅人

Shiho MOCHIZUKI　Haruo NISHINOSONO　Masato HORIDE

特定非営利活動法人学習開発研究所

NPO Institute for Learning Development

＜あらまし＞　参加型の教員研修において、参加者がより効果的に学習成果を習得するためには、研修で学ぶことの意味に照らし合わせて学習目標を意識的に選択できるような構造が望ましい。本報告では最終成果から多様な意味付けを抽出することで、両者を対応付けた学習目標を提案する。

＜キーワード＞　教員研修　学習目標　協調自律学習　授業設計　授業研究

１．問題提起

筆者らは京都市教育委員会総合教育センター主催の 2009 年度京都市中学校初任者研修会（独立行政法人教員研修センター研修モデルカリキュラムの開発事業による）の設計・運営を担当した。学習成果は、文部科学省初等中等教育局職員課「初任者研修・目標例」における「①基礎的素養，６　教員研修と教員としての生き方在り方」の「自己の職能成長に関する課題と校内研修・研究の関連を明確化し、実践能力や専門的知識・技術を身につける。」に近い形で設定してある。

参加者個々からの教育技術の抽出とそれを用いた戦略的な授業設計の実現が目的であるため、協調自律的な枠組みで参加者が相互に経験を引き出し合う取り組みが求められる。その際、自分で学習目標を適切に選択し、自分の学習を方向づけることが重要である。さらに、自分が今何を必要としているか、どのように学びたいかという、研修で学ぶ意味に照らし合わせた目標設定ができるようにする必要がある。しかしながら、2009 年度の実践では、が期待された成果のみが示されており、また構造が非常に複雑であったため（表 1）、目標設定の段階で混乱がみられた。

２．研究の目的

参加者の学習する意味が研修の初期段階で不明確であっても、研修を終えた後の内省の過程で、研修内容と成果を意味づけることができる。この意味づけが、可能な限り初期段階で行われることで、さらに学習成果を高めることができると考える。本研究では、まず最終レポートの感想部分を分析して学習する意味を抽出することにした。

３．研究の方法と対象

2009 年度採用 1 年目研修（2009 年 8 月 3 日～6 日）の受講者 66 人の最終レポートにおける「全

表１　　目標設定の構造（2009 年度実施）

成果レベル		目標の満足度	必要な労力 ※
AA	他の教員に自分の授業の構造と方略について根拠を示しながら説明することができるようになる。	★★★★★	最大
		★★★	多
		★	中
A	さまざまな指導場面に適用できる技術と、自分の技術のレパートリーを説明できるようになる。	★★★★★	多
		★★★	中
		★★	少
B	授業を組織的に改善する意義と手順を、自分の言葉で説明できるようになる。	★★★★★	中
		★★★	少

※　必要な労力

最大：　仲間と研究グループを作り、継続的に研究する計画を立てる。

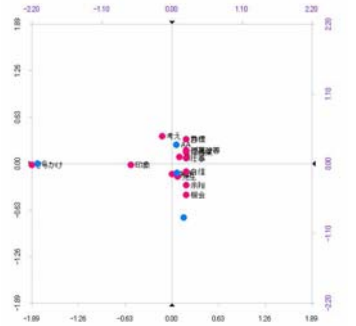
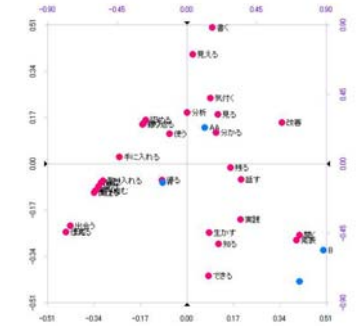
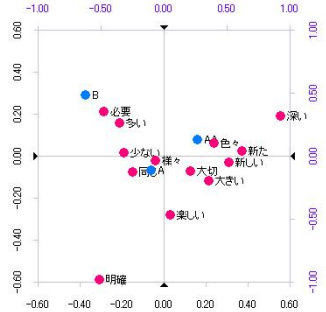
多：　研修後の 1 ないし数校時分の学習指導案を作成し、実施後に修正する。

中：　（少）+配布資料や集めた情報を十分検討し、考察を深める。

少：　設定された研修には積極的に参加する。

学習目標設定例　「私は、この研修で成果レベル AA を3つ星程度満足できるように目指したい。そのためには、研修中に設計した授業を研修後に実施し、学習指導案を修正するだけの労力を投入する必要がある。」

表 2　レポートの感想からみた各成果レベルの学習の意味付け　※グラフは当日発表において拡大図を提示予定

	①どんなことに注目して	②どんなふうに学ぼうとして	③どんなふうに感じたか
AA	プロとしての仕事内容	物事の変化や関係をみようとする	新鮮だなあ
A	自分のモチベーション	人と関わる中で得ようとする	共通しているなあ，多様だなあ
B	今後の活動のきっかけ	発表などの場で人から聞こうとする	必要だなあ
			
現象分析 AA(技, 指導案, 授業改善, 目標　等) A（仲間，自信，先生，余裕　等） B（きっかけ）	行動分析 AA(分かる, 見る, 気付く, 分析　等) A（得る，取り入れる，協力　等） B（聞く，発表）	感性分析 AA（新た，新しい，色々） A（同じ，様々） B（必要）	

体的な感想」部分を対象とし、株式会社ジャストシステムのテキストマイニングソフトTRUSTIA を使って、現象分析、行動分析、感性分析を行い、それぞれ異なる成果レベルを目指した参加者が、①どのようなことに注目し、②どのように学ぼうとし、③どのように感じたかを整理する。分析の際にとりあげた項目は、頻度と一致度の高いものを基準とした。

本研究では西之園(2004)の MACETO モデルを用いて①②③を参加者の学習の意味(M)として位置付けることとする。また、学習者が選択する学習目標は、学習する意味(M)と成果(O)で構成することとする。

4．結果

テキストマイニングソフトを用いてレポートの感想を分析した結果、選択した最終成果レベルによって学習の意味の傾向が異なることがわかった（表 2)。高度な学習成果である AA は、授業を研究することに学ぶ意味があると捉えている様子が伺える。A と B は自分自身の成長に関心があることで共通しているが、その学び方に違いがみられる。A は人と関わり合いながら自分も発信する中で成長していくことに、B は人の意見を参考にする中で重要なヒントを得ることに価値をおいている。

5．考察と今後の課題

分析により、参加者それぞれが期待する学習成果とは異なる言葉で研修を意味づけていたことがわかった。これを利用し、新たな学習目標の在り方として、目標設定の段階でいくつかの学ぶ意味のモデルと対応する学習成果を選択できるようにする（表 3)。今後は、参加者が目標設定する上で新たに提示する学習目標の設定方法の有効性を検討する必要がある。

参考文献

文部科学省初等中等教育局職員課(2007)「初任者研修・目標例」http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/kenshu/006/006 (2010/07 アクセス)

西之園 晴夫 (2004)柔軟な授業を創る．教育の方法と技術 pp.135-139

表 3　学ぶことの意味と学習成果を対応させた学習目標

研修で学ぶ意味	専門性の向上に強く関心があり、物事の変化や関係を読み取って新たな視点を得たい。	人と関わりをもつ中で、共通点や相違点を共有したりしながら、仲間や自信を獲得したい。	いろんな人の発表や話を聞く中で、自分に必要だと思うことをつかみ、充実した授業研究のきっかけをつかみたい。
学習成果	他の教員に自分の授業の構造と方略について根拠を示しながら説明することができるようになる。	さまざまな指導場面に適用できる技術と、自分の技術のレパートリーを説明できるようになる。	授業を組織的に改善する意義と手順を、自分の言葉で説明できるようになる。